大阪でのユネスコ全国大会終る

「第77回日本ユネスコ運動全国大会 in 大阪」は、2021年12月5日(日)に桃山学院教育大学(大阪府堺市）を会場にして開催されました。大会テーマは「いのち輝く持続可能な世界を繋ぐ～大阪から世界へのメッセージ～」で、日本のユネスコ加盟70周年を記念して開催されました。

2020年度の全国大会（山口県宇部市）は新型コロナウイルスの感染拡大により中止になったため、2年ぶりの全国大会開催となりました。

会場には近畿ブロックの会員約160名が参加し、約140名がYouTubeライブ視聴でオンライン参加しました。また、公共施設での視聴会を実施したユネスコ協会も15協会ありました。

開会式では外務省の曽根健孝国際交流文化審議官、文部科学省の田口康国際統括官がオンラインで祝辞を述べ、ユネスコ本部のオドレ・アズレー事務局長、大阪府の吉村洋文知事、北京市ユネスコ協会のソン・リジュン会長からのメッセージが披露されました。また、京都大学iPS細胞研究所長の山中伸弥教授などからビデオメッセージが寄せられました。

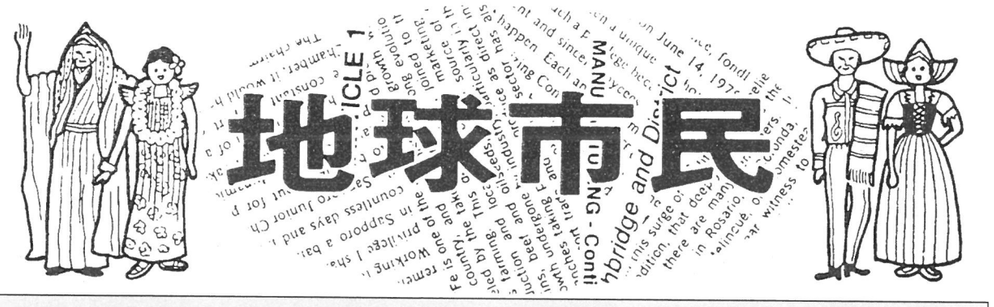
大会は、近畿ブロックの青年による実践事例の発表や、「誰ひとり取り残さない社会の構築」というテーマのパネルディスカッションなど充実したプログラムで進められ、明日からのユネスコ活動に生かすことのできる示唆に富む討議が展開されて、終了しました。なお、2022年度の全国大会は千葉県の木更津市で開催される予定です。

江別ユ協の動きMEMO

（2021年2月～2022年1月）

◇**事務局だより発行**　2月1日号。
◇**道内ユ協との機関誌交換**　2月3日発送。
◇**カレンダーの国際交換**　2月3日、コロナ禍による国際運送停止の中、可能なインド、韓国に発送
◇**「江別国際センター冬の集い」に参画**　2月開催予定（主催は江別市国際交流推進協議会）中止。
◇**会員募集ポスター掲示**　3月中旬、市内要所に。
◇**事務局だより発行**　3月29日号
◇**使用済み切手回収活動**　3月20日、回収した約3,000枚を検収。JOCS（日本海外医療協力会）が受入れ作業休止のため当事務局で保管。
◇**会計監査**　4月28日（教育委員会会議室）
◇**江別ユ協役員会**　4月30日（教育委員会）
◇**事務局だより発行**　4月30日号。
◇**江別ユネスコ協会定期総会**　5月25日開催予定（野幌公民館）対面会議は中止。議事は書面決議
◇**北海道ユネスコ連絡協議会定期総会**　5月29日開催予定（札幌かでる2･7）コロナ禍のため対面会議中止。議事は書面決議。
◇**事務局だより発行**　5月31日号。
◇**日本ユネスコ協会連盟へ現況届提出**　7月20日。
◇**北海道ユネスコ連協・常任理事会**　7月24日。（かでる2･7）田村副会長が出席。
◇**事務局だより発行**　8月2日号。
◇**第54回北海道ユネスコ大会**　10月9日(小樽ゴールドストン）押谷会長がオンライン参加。
◇**「えべつ世界市民の集い」に参画**　10月開催予定（主催は江別市国際交流推進協議会）中止。
◇**国連デー記念講演会**「地球温暖化への挑戦」10月25日（京王プラザホテル札幌）主催は国連協会北海道本部、道庁総合政策部国際局、講師：菅井貴子（気象予報士)、山中康弘（北大大学院地球環境科学院教授)。田村副会長が出席
◇**事務局だより発行**　10月29日号。
◇**事務局だより発行**　11月30日号。
◇**ユネスコ活動のしおり No.30「ユネスコの遺産事業と公園事業(2)」発行**　1月25日。

事務局　〒067-0074 江別市高砂町24-6
教育委員会･青少年係内☎381-1069 担当見上



江別ユネスコ協会会報　第５５号（2022・1・25）事務局・江別市教育委員会生涯学習課内

冬来りなば春遠からじ

－2022年の年頭にあたって－

江別ユネスコ協会会長　押　谷　一

あけましておめでとうございます。昨年に引き続き本年もよろしくお願いいたします。

新型コロナウイルスの変異株オミクロンによる第6波の感染拡大が懸念されるなかで新しい年を迎えましたが、皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。

昨年、東京オリンピック・パラリンピックが開催されました。開幕直前に無観客での開催が決定し、盛り上がるのか心配いたしましたが、日本選手はじめすべての選手たちの大活躍で世界中の人びとが感動し、大いに盛り上がりました。とりわけ、パラリンピックの選手たちの活躍を目の当たりにし、障害を乗り越えた体力はもちろん、気力に圧倒されました。視覚障害や手足の機能に障害をもつ選手が走り、泳ぎ、ボールを追い、組手で戦う姿に多くの人が感動したのではないでしょうか。コロナという見えない脅威に身をすくめ、窮屈な生活を強いられている私たちに、希望と勇気を与えてくれた、それだけでもオリンピック・パラリンピックの意義があったのではないでしょうか。

わたしたちのユネスコの活動も、この2年間にわたってさまざまな制約を受けてきました。感染を防ぐために学習会のような参加者が集まるイベントはすべて中止となりました。10月9日に小樽市で開催された第54回北海道ユネスコ大会も、オンラインでの開催となりました。多少、不便さを感じるところもありましたが、問題はなかったように思います。会場までの旅費などが不要であることは、メリットがある反面、ご当地の人びとと直接、交流できない寂しさや、一年振りに集まった全道の人びとと会食・交歓することのできない残念な面がありました。今後、オンラインと会場での参加との複線的な開催となったら良いように感じました。

大会ではまず、基調講演で小樽商科大学の穴沢眞学長から「大学の国際化」についてお話がありました。経済のグローバル化によって国際化は必然ですが、コロナ感染拡大によって海外への渡航や、海外からの留学生、観光客が制限されて国際化も閉塞感に覆われています。一日でも早く海外との交流が日常となることを祈っています。

続いて、困難な状況の下でも、活動を続けているユネスコ国内委員会の働きについて、国内委員の林朋子氏（旭川ユ協･会長）から報告がありました。つぎに日本ユネスコ協会連盟の活動報告、小樽市立高島小学校のユネスコスクール活動について発表がありました。さらに、小樽、知床、江差のそれぞれのユネスコ協会の活動について報告があり、コロナ禍のなかでも、工夫を凝らして活動を続けておられることに感銘を受けました。

これらの様子はオンラインでの配信とともに録画されており、江別ユネスコ協会にもDVDが送られてきています。昨年の秋にオンラインで視聴できなかった会員の皆様にお集まりいただき視聴

することも考えたのですが、感染拡大が懸念され、延期することにしました。

関係者の閉会のご挨拶があって大会が終了したあと、非公式ですが、北海道ユネスコ連絡協議会の大津和子会長より、参加されている地区ユネスコ協会からそれぞれの活動を報告する機会が与えられ、わたしも江別ユネスコ協会を代表して、活動の一端を紹介させていただきましたので、ご報告いたします。

なお、さきに申し上げましたように、新型コロナウイルスは、変異を繰り返し、容易に収束することは難しいようです。このような中でですが、今年は皆様とご一緒できるような企画を考えて参りたいと思いますので、企画案やご意見などをお寄せくださるようお願いいたします。

末筆となりますが、英国の詩人シェリーの詩の一節「冬来りなば春遠からじ」を心にとどめ、やがてコロナは収束することを確信し、皆様の元気な笑顔と再会できることを楽しみにして、新年のご挨拶とさせていただきます。

SDGsと ESDと 学習指導要領 と・・・

【時事雑感】　副会長 田 村 邦 雄

COVID-19（新型コロナウイルス感染症）は、2019 年 12 月に突然出現して、数か月の間に欧米に広がり、さらに世界中に飛び火して破壊的なパンデミックとなりました。今後数年間、人類は COVID-19 と共存することになります。この混乱の中で、私たちはここ数十年の間に人類を破局的状況に追い込みそうな慢性的危機を克服することを目的とした SDGs の存在を軽視したり、実行する気力を失ったりしないか、心配です。

SDGs（持続可能な開発目標）は、産業革命以降、急速に活発化した人類の活動により、経済・社会の基盤である「地球の持続可能性」が危ぶまれていることの対策として考え出されました。1972 年にマサチューセッツ工科大学のメドウズらにより発表された「成長の限界」は、地球資源を大量に消費しながら拡大してきた世界経済の成長が、このまま続くと 100 年以内に限界を迎える、という衝撃的な提言でした。1980 年には UNEP（国連環境計画）・IUCN（国際自然保護連合）・WWF（世界自然保護基金）が提出した「世界自然保全戦略」で、「持続可能な開発」の概念が示されました。

その後、1987 年に「国連・環境と開発に関する世界委員会（ブルントラント委員会）」による報告書「我ら共有の未来」が、「Sustainable Development（持続可能な開発）」という表現を用いてからこの概念が広く理解されるようになりました。

やがて 2000 年に開かれた「国連ミレニアム・サミット」において、SDGs の前身になる「ミレニアム開発目標（MDGs）」が、途上国の開発を主旨とし、2015 年を目標年として、極度の貧困や飢餓の撲滅など、8 つの目標を設ける形で採択され、加盟各国がその達成に努力することになりました。

その目標年が近づいた 2012 年、ブラジルのリオ・デ・ジャネイロで開催された「持続可能な開発会議」の成果文書「我々が望む未来」において、2015 年までに環境・経済・社会の 3 分野を統合した SDGs 案をつくること、その SDGs を MDGs の後継策とすることが決定されました。2015 年 9 月の「国連・持続可能な開発サミット」において、SDGs が「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」の中に記載され、2030 年を目標年として採択されました。（※アジェンダ＝国際的行動指針）

ところで、今日、ユネスコ活動が SDG s に深く関与することになった原因は、2002 年、ヨハネスブルグの「持続可能な開発に関する世界首脳会議」において、日本政府および NGO が「持続可能な開発のための教育（ESD）」を提唱し、同年 12 月の国連総会で「国連 ESD の 10 年（2005～2014）」の決議案が採択されて、その主導機関にユネスコ

が指名されたからです。このときはまだ MDGs の時代でしたが、2012 年の「国連・持続可能な開発会議（リオ＋20）」での宣言文に、2014 年以降も ESD を推進すると記載されました。

これに対応してユネスコは、2013 年の第 37 回総会で「国連 ESD の 10 年」の後継事業として「ESD に関するグローバル・アクション・プログラム（GAP）」（2015～2019）を採択し、さらに 2015 年ニューヨークでの国連サミットにおいて SDGs が採択されると、ESD は当然のように SDGs の中に取り込まれました。

SDGs は先進国を含む国際社会全体の目標として、「誰一人取り残さない」社会の実現を目指して、2030 年を期限とする包括的な 17 のゴール（目標）と 169 のターゲット（達成基準）で構成されています。ESD はそのゴール第 4「すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯教育の機会を促進する」のターゲット 4－7 に位置づけられました。

また ESD は、SDGs のすべてのゴールの実現に寄与するものであることが、2019 年の第 74 回国連総会において確認されています。持続可能な社会の創り手を育成する ESD は、SDGs を達成するために不可欠な、質の高い教育の実現に貢献するものとされたのです。これは、2019 年の第 40 回ユネスコ総会で採択された ESD の新たな国際枠組み「持続可能な開発のための教育：SDGs 実現にむけて（ESD for 2030）」（2020～2030）においても明確になっています。

「ESD for 2030」の採択を受けて、この枠組みの下で取り組むべき具体的な行動を示すロードマップが、ユネスコから公表されました。そのロードマップでは、5 つの優先行動分野と 6 つの重点実施領域が提示されています。優先行動分野は、①政策の推進、②学習環境の変革、③教育者の能力構築、④ユースのエンパワーメントと動員、⑤地域レベルでの活動の促進、の 5 つです。

同時にこのロードマップは、GAP からの主な変更点として、SDGs の 17 すべての目標実現に向けた教育の役割を強調し、「持続可能な開発」に向けて ESD を根本的に見直して、ユネスコ加盟国へのリーダーシップの強化をも求めています。

話題をすこし過去に戻しますが、ユネスコは、ユネスコ憲章の理念を学校教育の現場で実践する目的で、ASP ネットワークを 1953 年に立ち上げ、53 か国 33 校で開始し、日本からも中学校 4 校と高校 2 校が参加して「ユネスコ協同学校」と呼ばれました。2008 年にユネスコ国内委員会がこれに注目し「ユネスコスクール」と改称して支援を強化してから急速に発展して、2019 年までに 1,116 校がユネスコ本部から認定されました。文部科学省およびユネスコ国内委員会は、ユネスコスクールを ESD の推進拠点の 1 つに位置づけました。

2015 年に SDGs が始まると、当然 SDGs がこのユネスコスクールの教育内容に取り入れられ、これを契機として 2016 年 12 月には中央教育審議会が「ESD は、次期学習指導要領改訂の全体において基盤となる理念である」と答申したので、2020 年度から施行された新しい学習指導要領には SDGs の考え方が大幅に盛り込まれました。

その前文には「これからの学校教育には、（中略）一人一人の児童・生徒が、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協議しながら、様々な社会的変化を乗り越え、**持続可能な社会の創り手となる**ことができるようにすることが求められる」とあります。個人の成長を重視しつつも、変化の激しい世界の中で、十分な責任を果たすことも求められるように変わったのです。

この学習指導要領を法的根拠として、どの学校も ESD に向けて教育課程の編成に頭を悩ませることになりました。「ESD で学力は育つのか？」「受験は大丈夫か？」「基本的な知識・理解の方が大事ではないのか？」等々、様々な疑問が湧くでしょうが、今や SDGs のことは小学生の方がよく勉強しています。地球の危機をまともに受け止めるのは、彼らの世代なのですから・・・。